

2020 The New Earth

A travel report

——ネイサンの物語——

4. マニュエル

「ほーらね。言った通りでしょう」サミラは歓声をあげている。

「マニュエルだわ。迎えに出ましょう！」

彼女はもう彼のそばにいて、僕は出遅れた。彼女は彼を抱きしめて心からのキスをしている。僕は「ああ、彼女のボーイフレンドか旦那さんなのだな」と思い、自然に歩みが遅くなる。二人はハグし終わると、サミラが僕のところに戻ってきた。

「マニュエル、こちらはネイサン。ネイサン、こちらはマニュエル。ネイサンがちょうど立ち寄ったので、一緒にレモネードを飲んでいたところよ。彼はとても面白い話を聞かせてくれたの」

大きなフレンドリーな笑みを浮かべて、マニュエルが僕に近づき、挨拶のハグをする。僕はそれに抵抗できなかったが、あまり抵抗したとも思わなかった。彼のフレンドリーなカリスマ性が、僕に安心感を与えてくれる。

「ようこそ、アミーゴ。君に会えて嬉しいよ。ちょっと混乱しているように見えるけど、大丈夫かい？」

僕は当惑した。何て人たちだ？僕は、僕の周りにヒッピーがいることに慣れているし、僕自身も似たような者だと思っている。互いに親しく触れ合うことにも慣れているし、男同士でハグすることさえある。でも、ここでは……何が違う。より**本物**でとても自然だ。僕には説明できない。彼は真っ直ぐに、僕の「すべては大丈夫さ」というすまし顔を見透かして、直接それを口にしたのだ。とて

も思いやり深い人物だ。**二人**の思いやり深い人たち。それでも疑問は残ったまま。僕はどこにいるのだろうか？

マニュエルが「どんな話をしたんだい？」と家に続く道の途中で聞いてきた。僕は、サミラが僕に話してくれたことよりも、僕の話の方が彼らにとってずっと面白いことに気が付いた。僕はすっかり混乱しきっていたので、座らなければならない。僕は目眩に襲われた。すると、二人は即座に僕を支えてくれた。

「しっかりして。君をベランダに連れていくよ。そこで気を取り直したらいい」僕にはどちらがそう言ったのかさえわからない。気付くとベランダの椅子に座っていた。僕はグラスを取り——3杯目の極上レモネード。この暑さにもかかわらず、まだひんやりしている——少しすすった。サミラは屋内に入っていき、マニュエルが僕のそばの椅子に腰掛ける。僕は、彼が注意深く僕を見守っているのがわかる。僕は再び彼の大きな愛情と暖かさを感じ取った。それは僕には説明できないものだ。僕は、まるで自分が世界で一番重要な人物であるかのように尊ばれ、氣遣われているのを感じた。それは言葉では表現できないものであり、まったくさりげないものだった。

彼が笑みを浮かべて「良くなったかな、アミーゴ？」と尋ねる。僕は彼を見て、彼の眼差しに心打たれた。僕は、本当に友人たちには恵まれている。何かあったとしても、共にうまく切り抜けていこう。しかし彼の眼差しは、愛と思いやりと慈悲に満ちており、僕には馴染みのないものだった。しかし、居心地の悪さはまったく感じない。それは誘惑とかゲイとかには一切関係なく、父と息子の間にあるようなものだった。サミラがクッキーのお皿を持って戻り、卓に加わった。僕は喜んで一つつまむ。すごくおいしい。「ネイサンは2015年の9月以降に起きたことを何も覚えていないの。たとえ、経験していたとしても」サミラがこう言ったのは、マニュエルがまだ僕に何も聞いていないと思ったからだろう。マニュエルは眉を上げてみせたが、何も言わない。僕が何か言う機会を与えてくれているのだ。僕は簡単に話を繰り返すと、彼はとても興奮した。

「よくある話じゃないよねえ」彼は笑ってから、「気分は良くなったかな、大丈

夫かい？」と単刀直入に尋ねた。

僕は充分良くなったので、そう答えた。ともかく、二人のおかげで、僕は混乱の中で自分を見失わずにすんだ。

「サミラは、僕がどこにいるのか教えてくれたのだけど、僕の頭はそれを信じてがらない。タイムトラベル？ 記憶喪失の可能性はもっと薄い。だって 2 週間前の脚の擦り傷が、とっくに治っているはずだもの。それに 5 才も年をとったなんて思えないよ」疑問点を話しているうちに、僕の頭がすっきりしてきたようだ。感覚が戻り、自分に何が起きたのか本当に知りたくなった。

「さて」深く考え込んでいたマニュエルが口を開く。「もし君が本当に自分に起きたことを知りたいのなら、まずはそれを信じないと。もし君が何かの存在を信じなければ、君はそれを理解することができないよ」彼はそれを自明のことであるかのように、そして愛情を込めた調子で言った。

「僕自身はまだタイムトラベルを経験したことないが、インターネットでは、タイムシフトを経験した人たちがどんどんレポートをあげているよ。そういうことに興味をもって調査に没頭しているグループがある。僕たちが、時間は直線的ではなく、空間は、僕たちが前もって存在を把握することにおいて存在する、と学んで以来、僕たちの目の前には、調査すべき、まったく新しい時空連続体があるんだ」

「待って、ストップ！ 一つずつお願い！ インターネットはまだ存在していて、時間は**直線的じゃないの？**」と僕は尋ねた。彼らは二人とも心から大笑いしたので、僕も一緒に笑わずにはいられなかった。自分の言ったことの何がそんなにおかしいのかわからないが。

「インターネットはまだここにあるわ。多分あなたにはそれを認識できないでしょうけど」僕たちの笑いがおさまってからサミラが説明する。「そして時間は直線的じゃないのよ。私たちはただそのように知覚しているだけ。昔アインシュタインが言っていたでしょう。時間は相対的なものであり、時間に限らず**あらゆるもの**がそうだと。あらゆるものは観察者の視点から見られるわけだから、あらゆるものが相対的なものよ。5 分間があつという間に感じる場合もあれば、永遠に続くように感じる時もある。人によってそれぞれよ。これまでの定説が消えてか

らは、それを探求する価値があることが、私たちに明らかになってきたの。最初の人たちがそれを探求し出したら、異常性のレポートが次々に集まり始めたのよ」「ごめん、ちょっと質問させて。UFOはもう着陸した？」

彼らはプツと噴き出し爆笑した。だから僕も笑わなきゃならなかった。どつきりショーみたい。

「いいや、ネイサン、僕のアミーゴ。それはまだ起きていない。それが起きるのを待っている人はまだいるけど、僕たちしか宇宙にいないと思っている人は、地球にはいないと思うよ。絶対、僕らだけが唯一の知的生命じゃない。今日では、僕らが『ここから来た』のではないこと、宇宙によって命が創られたが、地球で発達したのではないことを、僕たちは皆知っている。僕たちが周りで見ているものすべて、**何もかも**が意識によってまとめられているんだ。僕たちは地球の外に存在するものと接触しているよ。僕らのインターネットを通じてね。ますます多くの人たちがアクセスするようになってきたんだ」マニュエルは僕のいぶかしげな顔つきを見て続けた。

「すべてのものがあらゆるものに繋がっている。つまり、分離というものは存在しないんだ。それは僕たちの想像の一部。だって僕たちが知覚する**あらゆるもの**が僕たちの想像の一部なのだから。僕たちがあらゆるものを我々自身の中に知覚するのはそのためだ。そして我々自身の中にすべてであるものに通じる戸口がある。テレパシーを知っているだろう？ 僕らが話題にもしていないことを、言い当てることができるよ。例えば、僕が戻る少し前に、サミラは、僕が間もなくここに着くことを感じただけでなく、それを君にも伝えた。こういうことは、僕が今言ったインターネット上で機能するんだ。その名前はほとんど自然についた名前だよ」

「午後のひとときにしては、随分たくさん情報だったなあ」僕は深呼吸しながらそう言った。

「あそこのタワーは何？ ニコラ・テスラの実験を思い出すのだけれど」 気を立て直すために話題を変えようとした。

「よく分かったね。いい線いってるぞ」マニュエルが笑いながら言う。

「たった今僕は、車がいかに静かに走るか考えたんだ。僕とサミラにとって、そ

れは何も珍しいことではないし、いつもと違ったところもなかったので、僕はその考えが君から来たのだと推測した。この通り、僕たちは皆繋がっているんだよ。君だってそうさ。君がまだ意識的にそれを利用できないとしてもね。君はいつだってずっと繋がっていた。タワーは特定の場所に建っていて、テスラが『スペース・エネルギー』と呼んだものを我々に供給しているんだ。2016年に、それアクセスできるようになった。それを開発している研究者が、迫害されて中断させられたりしなくなったからだ。最初の実用モデルはあっという間に利用できるようになり、今も進化している。中には、景観を損ねないように植物で覆って見えなくしているものもある。私たちにエネルギーを供給しているだけでなく、インターネットも電話もそれらを通して使えるようになっているんだ。車もこのエネルギーを利用して走っているよ。タワーに近づくと自動でチャージされるバッテリーが搭載されているんだ」